国立科学博物館所蔵 逐次刊行物目録と 自然史文献センター

小 林 貞 一

Catalogue of Serial Publications in the National Science
Museum, Tokyo, 1979 Edition and Central
Library of Natural History

Teiichi KOBAYASHI

何れの学問に取っても文献が大事なことは言うまでもないが、自然史学の多くの分野ではその調査研究上で、古い文献からまた世界各地のものまで特に広範な文献を必要としている。それ故にその網羅的蒐集のための自然史文献センターが極めて必要で、そのようなセンターの出来るための第一歩として、標題の目録が出現したということは喜ばしいことである。

この目録は546頁からなり、欧文篇 (1-178頁)、和文篇 (179-257)、欧文 KWIC 索引 (259-513)、和文主題索引 (515-542)、スラブ文字誌名索引 (543-546) からなっている。欧文索引で *Musea*, *Musée*, *Museet*, *Musei*, *Museo*, *Museum*, *Museia* など *Museum* 関係を見ると 1 頁 74 行組で 394-403 頁に亘り、大約 700 行を占めているのでそのタイトルは 600 種以上に及んでいるであろう。同じように推算すると *Geology* は 700 種以上、また *Palaeontology* と *Mineral*, *Mineralogy*, *Mines* とは 各々 100 種以上あり、動植物学関係はさらに多く、*Academy*, *Academia* や *Royal Society*, *Linnean Society* などかなりの数に及んでいる。

和文索引は主題に従って分類されていて、左右 2 列に組まれ、各列 62 行であるが、博物館は 517-521 頁に亘り約 350 行を占めているので、国内の博物館、特にその自然史関係の逐次刊行物は非常によく集まっていることが判る。地球科学と古生物

を合せると約 3 頁近くあり、これもかなり集まっている。学会誌は学会相互で、また教室の紀要類や、地質調査所などの出版物も相互に手広く交換することによって国内の文献は充実する。そのような観点からこの目録は科学博物館のものとしてふさわしい姿をしている。

序文によるとこの目録は現在館の所蔵する文献中の自然史関係を中心として編輯されているその蔵書は館の創立以来のものに日本学術会議 (JSC) から移管された自然史学文献が加わり、さらに日本動物学会から委託された蔵書も載っている。その関係もあって、よく調べた訳でもないが、戦後のものが過半を占め、戦前のものは割合に少く、戦前戦後に継続しているものはさらに少いようである。非常に欠号が多く、1 冊ないし数冊のものも決して少数ではない。JSC から移管されたものは専ら輯報類との交換図書で、輯報類は 1922 年に学術研究会議から発刊されたのであるから、およそ 60 年間のものが累積している筈であるが、第二次大戦末に混乱し、またその後 JSC では文献資料が永らく看却放置されていた。この不始末はまことに残念である。

1965 年の JSC 年報によると、4 部 (理科) 関係の輯報類 6 種 (数学・地物・地質地理・動物・植物・海洋) の 4,880 冊が海外 83 国に頒布されていた。その頃の JSC 蔵書約 4 万冊のうち、学術雑誌を主とする外国文献は約 3,000 種で、そのうち

冊が自然科学であった。

内外から高く評価されていた6種の輯報類は1969~1975年の間に逐次廃刊され、1976年から日本自然科学集報すなわち *Recent Progress of Natural Sciences in Japan* が僅かに年1冊出ることになり、第1巻は数学と地物、第2巻は動物・植物・海洋、第3巻(1978)は地質・古生物・鉱物・岩石関係であった。そして当初は2,500部印刷、500部を国内、1,900部を海外の機関に頒布することになっていた。しかし現在では印刷部数も海外向けの発送も著しく縮小されている由、しかし過去の実績のおかげで、海外からは今もお年間約3,000種、8,000冊の交換・寄贈図書があり、その大部分が自然科学関係であるとのことである。JSCの図書課は手薄ではあるが、次々と到来する文献中から自然史関係のものを迅速に整理して、博物館へ移管して江湖の利用に供すべきことを忘れてはならない。

JSCの6種の輯報類から年刊の1集報へと後退したのに引きかえて、国立科学博物館では1939~1953年に33号まで出してきた研究報告(Bulletin)を、1954~1974年まで New Series として17冊を出し、1975年からA-Dの4類(動物学・植物学・地質古生物学・人類学)に分けて季刊とし、1978年にはE類(理化学)を追加した。現在ではA-Cを各600、Dを400、計年間2,200×4の8,800冊を印刷している。そして、海外には全体で698×4冊を、C類だけでは189×4冊を送っている。その外に専報(Memoir)291冊を海外に頒布しているとのことである。このような進歩はあったとはいうものの序文に述べているように「わが国における自然史文献センターとなる」ためには大いに交換を拡大する必要があり、それと同時に研究報告や専報が博物館のものから、わが国自然史学の代表的な出版物へと飛躍的に発展して行くことが望ましい。

自然史学では標本と文献が特に大事である。生物の学名は動植物でその出発点が多少違っている。動物ではリンネの *Systema Naturae* 第10版1758年が発端となっている。植物では類によって異り、顕花植物と羊歯類・地衣類および大部分の藻類はリンネの *Species Plantarum* 第1版、

1753年を出発点として最も古く、他の部類は別に定められている。古生物学の場合にはその命名の先取権は動植物の命名規約に準じている。それ故目前の生き物や化石を何というかという学名の出発点が18世紀半ばまで文献を遡ることを要求しているのである。日本産化石に対して命名された最古の学名は *Fusulina japonica* Gumbel, 1874であるが、外国人の日本の植物・動物の研究史も18世紀のKAEMPFER や THUNBERG まで遡るのである。従って、先明治の古典と共に逐次刊行物の Back Number の補充が極めて重要である。

自然史学文献の網羅的蒐集は最近とみにその必要度を高めてきた。参考までに文部省科学研究費による昭和38~50年間の海外研究を見ると、その総課題数は278件で、参加研究者数は延べ1,400余人に及んでいる。その研究調査の大多数は自然史学ないしそれと密接に関連している課題名に地域や分野の明示されていないものもあるが、そのうちの少くとも50~60件は地学関係である。参加研究者2,090人中、岩鉱を含む地質学者268人、地球物理学者119人、地理学者115人で合計502人である。地域的に見ると東南アジアが453人、西アジア・北アフリカ403人、南アジアが253人、計1,109人で、第4位が中南米の247人、第5位がアフリカ(サハラ以南)の231人となり、残余が欧米その他となっている。このように旺盛になってきた海外学術調査研究を実のりあるものとするためには世界的視野で自然史学に重点を置いた文献の網羅的蒐集が不可欠である。

JSCが蔵書目録を永らく公にしなかったのに反して、国立科学博物館がこのような目録を出版したことはまことに喜ばしい事であるが、年を同じうして文部省の学術雑誌総合目録自然科学欧文編1979年版が出た。同年であるから博物館のものは文部省の最新版には載っていないものが多数含まれていることを附言しておく。

このような総合目録の編纂は初め学術研究会議で始められ、大正12年(1923)に外国学術雑誌目録の初版が出来、その後改訂増補された。戦後学研が解散後この作業は文部省で取りあげられ総合目録の初版が昭和28年(1953)に自然・人文科学の欧文篇2冊として出来、その翌年和文篇2冊も出版

された。そのうちには旧帝大の蔵書が収録されているに過ぎなかったが、後に文部省の学術奨励審議会のうちに学術文献総合目録分科会が出来、改訂増補が繰返されるごとに、収録機関を諸大学・直轄研究所から省外の研究機関等へと拡張されてきた。

文献の蒐集にまたその目録の作成には永年の不断的努力が必要で一昨年に開館30周年を迎えた国立国会図書館 (NDL) にはその所蔵する和雑誌目録 (昭和51年) や欧文雑誌目録 (昭52) があり、前者には28,282種、後者には1,034種が収録され、共に追録も出ている。また蔵書目録として科学技術関係欧文会議録目録 (1948~1969, 1970~1976) もでている。その他に日本科学技術関係逐次刊行物目録、1974年には7,087タイトルが収録されている。NDL には諸官庁の33支部図書館があり、そのうちには日本学術会議、国土庁、文部省、農林水産省、工業技術院、海上保安庁、気象庁などが含まれている。東洋文庫も NDL の支部となっている。それら NDL の本支部全蔵書を包含した総合目録が出来れば一層文献利用に役立つことは明かである。

昭和36年以来 NDL 内には科学技術関係資料整備審議会が設けられ、関係文献の網羅的蒐集とその利用が要請された。この審議会の第18回 (昭53) の記録によると、NDL には12,000種の外国雑誌を所蔵しているが、継続受入れているのはその約半数である。そして、国内の大学・研究機関の収集状況を見ると総計15,000種である。英国図書館貸出局的収集雑誌 (人文社会部門数千種を含む) は47,500種であるから我国の総数はその3分の1に過ぎないことになる。なおオーストラリアの国立科学技術図書館の収集雑誌は20,000種である。また米国の議会図書館・国立医学図書館・国立農業図書館・カナダの科学技術情報機関等は各々20,000種あるいはそれ以上を収集している。換言すれば我国の総数はその4分の3以下であって、世界一流のレベルからは程遠い。

自然史学上では眼前の資料を単にローカルなものとしてでなく世界のうちの存在として把えて研究することによってその成果の意義が著しく高揚されるのである。そのために参考文献を探し求め

る場合、文部省の学術文献目録は最も重要な手引になって来た。そして古い文献でも存外日本にあるものだと思うが、また割合に新しい逐次刊行物でも、国内の何処にもない。あっても、所要の巻号が欠けているために、失望することもまた少くない。古い欠号の補充は至極困難であるとしても、新しい文献では巻号数を揃える。また差当りは利用されない逐次刊行物でも、将来は国内のどこかで見られるという理想を実現したいものである。

昭和23年頃学術研究会議内に設けられた外国文献利用委員会のお世話をしていた当時を省みると、この30余年間の文献利用に於ける発展はまさに隔世の観がある。しかし日本の世界的地位は、それを上廻ってきた。狭い国土を極度に利用するにも、産業のための原料を広く海外に求めるにも、郷土を知り、世界を視る自然史学が根本である。国の内外を問わず天恵に与かり、天災を防ぐための自然史学の土台は地球の科学でありその上に生物や人類の科学が樹立しているのである。そのような自然史学上の文献の充実と利用には、NDL も大学も努力しなければならないが、それらの間の盲点ともいべき部分を突いて、綿密に収集に当るような自然史文献センターは、独り学者のためのみではなく、広く国民のために、また国民が世界文化に寄与するために必要欠く可からざるものである。

参考文献

- 江崎悌三 (1930) : 動物命名規約, 岩波講座, 生物学,
- 本庄久世 (1978) : 国立国会図書館における総目録の沿革. 科学技術文献サービス, **49**, 40-49.
- 海外学術調査に関する総合調査研究班 (1977) : 海外学術調査関係研究者名簿. 99頁.
- (1978) : 海外学術調査分野別・地域別参加研究者数一覧. 29頁.
- 小林貞一 (1949) : 外国文献難の緩和. 科学, **19**(6), 263-264.
- (1963) : 国際学術交流と欧文刊行物. 学術月報, **16**(9), 503.
- (1969) : 日本地質学地理学輯報40巻, 地学雑誌, **78**(2), 64-70.
- (1978) : Japanese Journal of Geology and Geography. **40**, 1970 などから Recent

- Progress of Natural Sciences in Japan
3, 1978まで. 地学雑誌, 87(6), 368-369.
地学雑誌, 87, 6, 368-369.
- 横山次郎(1961): 動物学名法解説. 化石, 2,
44-56.
- 丸山泰通(1978): 日本における「全国総合目
録」沿革ノート. 図書館研究シリーズ, 19,
1-100.
- 中井猛之進(1930): 植物命名規約に就いて.
岩波講座, 生物学,
- NDL(1980) 国立国会図書館三十年史: 資料
編, 660頁.
- (1980) 国立科学博物館所蔵逐次刊行物目
録: 1979年版の刊行. 国立科学博物館ニユ
ース, 980-5.
- 寺田瑛子(1978): 科学技術関係欧文雑誌総合
目録について. 図書館研究シリーズ, 19,
117-138.
- (1980年5月7日受理)